

①大学（薬・香薬以外）

② 入試区分

Ⅲ期

③ 出題科目

現代の国語・言語文化（古文・漢文を除く）

④ 出題の意図

問題の一は、川内有緒の文章「読めること/読めないことの先」から出題。読書における身体性と環境の重要性について述べた文章。設問では、漢字の読み、空欄補充、キーフレーズの具体的把握、比喻表現を用いた意図の説明、近代作家の作品名(選択)、本文全体の趣旨などを問うている。問題の二は、戸井田道三の文章「日本人と色」から出題。文章における「つや」の意味について述べた論説文。設問では、漢字の書き取り、キーフレーズの理由の把握(選択)、同(記述)、指示語の指示内容の把握(抜出し)、同(記述)、本文の趣旨をふまえたキーワードの具体的説明、キーセンテンスの補充位置などを問うている。問題の一・二とも、随筆的文章の標準的な読解力をはかる問題となっている。

現代の国語・言語文化「古文・漢文を除く」

一 次の文章を読んで、あとの設問（1～6）に答えよ。

この春、九歳になる娘の部屋を作ることになった。それは、私と娘が一緒に使っていた寝室を開け渡すことを意味する。実は、ここ二年ほど娘にはずっと「自分の部屋が欲しい」と言われ続けていたのだが、そのたびに「おもちゃを断捨離したら」「片付けができるようになったら」「毎日ひとりで寝られたら」などと条件をつけては先送りするという身勝手な親ぶりを発揮してきた。娘は条件をひとつずつクリアし、ある日、言った。

「ママは、いつ約束を守るつもりなの？」

もはやこれまで。娘と使っていた大きなベッドを粗大ゴミに出し、娘用にロフトベッドを購入。大きなクッションと文机を置き、本を読んだり物を書いたりするスペースも作った。東に向いた窓から光がふんだんに入り、なかなか居心地の良い部屋の完成だ。

③、と思った。夫はずいぶん前から仕事場を兼ねた個室を持っていた。ふたりばかり、ずるいじゃないか。私なんていまだにダイニングテーブルで仕事をしているんだぞ。それなのに、ついに寝場所まで失ってしまった。

そのとき突如、リビングからひと続きになった和室が目に入った。これまでは家族の共有スペースだったが、襖を閉めれば個室にもなりそう。そう、せめて寝るときだけはここを私の部屋にしよう。手始めに自分好みの白い綿のカーテンをかけ、シンプルなラグを敷き、マットレスを新調した。それだけでも、自分の部屋という手触りが生まれた。

私は眠りに神経質な方で、部屋や寝具が変わるとよく眠れない。果たしてそこは安住の地になり得るだろうか。

最初の数日は夜中に何度も目が覚めてしまう。少しでも自分を落ち着かせようと、眠れないときは本を読むことにし

た。手にしたのは読みかけだった韓国の小説である。

すると、あれ、と思った。なぜだか急に小説がグングンと読み進められる。

実はこの何年か、海外小説がほとんど読めなくなっていた。もともとは好きなジャンルであるだけに理由はわからない。とにかくうまく没入できず、ページをめくるたびにずるずるとスローダウンし、最後まで読みきれぬものは五冊に一冊程度という状態に陥っていた。^⑤

これは、きつと筋トレしてない身体と同じで、本を読む集中力や理解力が落ちているのかもしれないと思った。それとも、読書欲が減ったのかも。年を重ねると食欲も性欲も衰えるのと同様に読書欲も減るということはあり得る。どちらにせよ変わってしまったのは、自分自身だ。なにしろ、本というのは、姿形も中身も変わらないままに、常にそこに変わらずにある存在なのだから。それでも私は、冷凍庫に大量の肉を貯蔵するように、せつせと翻訳小説を買っていた。^⑥

それが、なんということでしょう。突如としてページを繰る動作がなめらかになった。^⑦私は夜な夜な、遠くへと旅をした。ソウルの本屋さんを訪ね、親友とアルプスに山小屋を建て、亀と共に時間どろぼうを追いかけて、台湾の街角で出会った若い女性に恋をし、大阪の焼肉店のために必死にキムチを漬けた。^⑧まるで長いトンネルを抜けたらそこは読書の国でした、という気分だった。

あ、もしかしたら。

この和室のおかげなのかもしれないと思った。この部屋には、家具やものがとても少ない。内装もシンプルでカーテンと襖を閉めると白い箱になる。窓は人通りが少ない道に面していて、夜になると物音はしない。要するに、視覚や聴覚から入ってくる情報がミニマムなのだ。このどこまでも質素な部屋が、私を小説世界にぱーんと投げ入れてくれるらしい。まるで映画館で見る映画と同じように。

かように読書というのは、視覚と脳を使った知的活動だと思われがちだが、実は思いのほか身体性を伴う行為である

らしい。そして、本さえあればどこでもできると思われがちだが、その活動の質は周囲の環境にも大きく左右される。

(川内有緒「読めること／読めないことの先」による)

設問

1 傍線部①②⑤⑦の漢字の読みかたをひらがなで書け。

2 空欄③に入れるのに最も適切なセリフをつぎのなかから選んで記号で答えよ。

アほんと、上出来

イまあ、あきれた

ウちえ、なんだよ

エこれで、清々よ

オあ、はやまった

3 傍線部④について、改装した和室が筆者の「安住の地になる」とは具体的にどういうことか、説明せよ。

4 傍線部⑥について、なぜ筆者は小説を買いためることを、冷凍庫に肉を貯蔵することにたとえたのか。両方の共通点に触れながら、具体的に説明せよ。

5 傍線部⑧の文は川端康成の小説『雪国』冒頭文「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」を意識して書かれた。つぎのなかから川端康成の小説を一つ選んで記号で答えよ。

ア 高野聖 イ 暗夜行路 ウ 富嶽百景 エ 山の音 オ 山月記

6 この文章の筆者は、円滑な読書のために、どういう要素が必要だと考えているか。三つの要素を挙げて、わかりやすく説明せよ。

二 次の文章を読んで、あとの設問（１～７）に答えよ。

A 私の書くエッセイは、よくつやがあるといわれる。論理をおった筋をとおすように心がけているだけで、特別に気どつたり、かぎつたり、色目をつかったりするわけではない。ふだん使っている言葉で、なるべくシャベルように書いている。すると、年寄りに似あわずつやがあるといわれるのである。素の人間に色気が無いから、私の書く文章にも色気は無い。でも、つやがあるといわれると、あるいはそうかも知れないと思い、^①少しばかりいい気持ちになる。そして、つやを意識して書くと、「へたに色気を出しなさんな」とたしなめられたりする。むずかしいものである。

B 気がつかなかったが、^②ここには重要な問題がかくれているらしい。

C 色気とかつやとかいったところで、文章は床の間や縁の板ではあるまいし、つやだし布巾でこすっていれば出てくるというものではない。だが、文章を織物とか裂地にくらべることがある。つやはないが目がつんで手織つむぎの味があるなどという。ぼそぼそと短いセンテンスでぶつきらぼうに言いながら、その言葉は緊密に結合して、すきまなく織りなされている。見ために派手ではないが、時間がたつほどシンカがあらわれてくる。^③このような比喩はくらべて考えたあげく、文章は板ではぐあい悪いが、織物ならびつたりだといっているのではない。もっとじかにくるのである。

D 文章の文は訓アヤである。綾とおなじ言葉であろう。糸をつむいで織りなしてゆくのが、文章を一語ずつつみかさねていく作業と結合して織布と文章との同一化がおこなわれたものと思われる。

E 事柄のいきさつを経緯という。タテ糸とヨコ糸を意味している。つまり事柄が展開するのをタテ糸とヨコ糸によって経過的に分析し、織られたあとをたどることが、経緯を語ることになるのだ。事柄の事は言葉の言でもあり、事柄の柄は着物のがらなどというあれだ。事柄も経過も、文と関連なしにはなりたたないことがわかる。そして着物のがらは色をぬきにしては考えられない。

F そのうえ文様を染めることもする。縞や緋や文様はパターンである。われわれは事柄の経緯をのべるとき、やはりパ

ターンによって、文を形成し説述している。どんなパターンをえらぶかが、まずのべるにあたってしなければならない最初の仕事である。

G 織物が一センチ織られ、二センチ織られて予定の完成をめざしてのびて、(のべられて) ゆくとき、われわれは経緯がストーリーを展開してゆくがような世界を感じる。糸は論理とっていいであろう。筋をとおすなどというとき、われわれは一本の糸が切れずにつながっており、それをたどれば一貫したものがわかるというイメージをもって語っている

H 織物を文章とむすんで考えているのは、それが比喻としてではなく、媒体としてであるのに気がつくであろう。文章のつやというのもやわらかな絹織物の^⑤コウタクからの連想であろうか。

I ^⑥むずかしいのは、文章の論理とかパターンということではなく、文章の味わいについて、やがあるなどというのはなぜかという問題なのだ。論理やパターンは、それを見るものがないなくても客観的にあると考えられている。一反の織物は着る人がなく見る人がいない場所に投げだしてあっても織物であり縞は縞、縞は縞である。しかし、つやのあるなし、しびいとか派手とかいう評価をふくむ言葉は見るものとの関連においてしか出てこない。だから論理やパターンがしゃべる人なくしてある言葉、つまり縞や縞や文様だとすれば、相手があつてしゃべる言葉の音声にこそつやとかしびいがあると考えねばならぬ。声にはつやがあつたり、のどにしびいのどがある。これらはしゃべる人自身の肉体を除外してはいえない。

人と人がいて、たがいにやりとりする言葉、それはただの論理ではない。一種のいいまわしであり、^⑦レトリックである。たがいを相手とする人と人との間柄をつつみこむ場なりたつ言葉である。

(戸井田道三「日本人と色」による)

設問

1 傍線部①に「少しばかりいい気持ちになる」とあるが、それはどうしてか。筆者がそう書く最も適切な理由をつぎのなかから選んで記号で答えよ。

ア 自分の書く文章が年甲斐もなく若さに充ちていると評価されたから。

イ 自分の書く文章がきちんと論理をおった筋が通ったものと評価されたから。

ウ 自分の文章が達意の文章であると高く評価されたから。

エ 自分自身には色気が無いにもかかわらず、文章に色気があると評価されたから。

2 傍線部②「ここ」とは何を意味しているか。具体的に説明せよ。

3 傍線部③⑤のカタカナを漢字に直せ。

4 傍線部④「このような比喻」とは何か。端的に示す箇所を抜き出せ。

5 傍線部⑥「むずかしいのは、文章の論理とかパターンということではなく、文章の味わいについて、やがあるなどというのなぜかという問題なのだ」とあるが、筆者がそう考える理由を文中の言葉を用いて四十文字以内で書け。

6 傍線部⑦「レトリック」について、筆者はそれをどういうものとして考えているか。文章全体の流れを踏まえて説明せよ。

7 この文章にはつぎの一節が脱落している。A～Iのどの段落の冒頭に配置されるのが適切か。もっとも適切な箇所を記号で答えよ。

経緯の織りなす柄は縞^{しま}あり緋^{かすり}あり地紋ありいろいろである。

一

① だんしやり

② いごこち

⑤ おちい

⑦ く

ウ

今後長い間、筆者が落ち着いてすごせ、よく眠れる場所になること。

本は読まずにためておいてもいたまないし、読みたいときにさっと取り出して読めばいいという点で、やはり保存がきき、食べたいときに取り出して調理できる冷凍貯蔵肉にたとえた。

エ

本を読む集中力とともに、静かで読書の邪魔をする要素の少ない環境と、リラックスした気分から身体性が整う（向上すること）が必要だと述べる。

6

二

エ

文章を書くときにつやをどのように意識するのか、ということ。

③ 真価

⑤ 光沢

つやはないが目がつんで手織つむぎの味がある。

5

評価をふくむ言葉は見るものとの関連においてこないことが理解されるから。
筆者の考える「レトリック」とは、ただの技巧的表現や論理ではなく、それを使う人の身体を通して理解する言葉であると考えている。

6

7

F